



徳島市民病院85年の歩み（1）



徳島市民病院事業管理者
露口 勝

徳島市の市議会で市民病院を設立しようという計画がはじめて論議されたのは明治26年9月25日のことである。徳島市が市民病院を興して県下医学の進歩を図り、公衆衛生の向上に寄与しようという事案であったが、困難な市の財政の中では賛成者少数で建設計画が見送られた。

次に市民病院の建設計画が持ち上がったのは昭和2年3月の市議会である。この時期に市民病院設立の要望が出てきた背景には、都市施設としての上下水道の設置や都市の公共交通の要望が出され、社会生活の中で保健衛生への関心が高まり、医療機関の充実が求められるようになったことがある。徳島市においても大正15年9月に上水道の給水が開始され、昭和3年3月の市議会では市営乗合自動車の創設費23万988円が可決されている。

昭和2年3月18日の市議会において市民病院設立案およびその予算が可決され、徳島市は徳島本町1丁目にあった市役所（現在の徳島地方裁判所北側国道沿い）隣の民家の土地と建物を買収し、その家屋を改造して昭和3年2月1日に市立実費診療所として開院した（図1）。この昭和3年の診療所設立が徳島市民病院の始まりである。それ以来、時代の移り変わりとともに市民の医療ニーズに応えながら、病院は増築や改築を繰り返し、設置場所を転々と変えている。



図1. 市立実費診療所

昭和3年2月の開設から今年（平成24年）で、徳島市民病院は創立85周年を迎える。7回目の新病院が完成した折でもあり、この機会に市民病院の誕生からこれまでの歩みを徳島市史 第5巻（民生編、保健・衛生編）など、いくつかの資料を参考にしながらたどってみたい。

1. 市立実費診療所

昭和3年1月25日付の徳島毎日新聞は、市立実費診療所の開所を予告して次のように報じている。「徳島市の実費診療所は、いよいよ来る（昭和3年）2月1日午前10時から千秋閣で開所式を挙行することに決定。知事・県各部長・医師団代表・社会事業関係団代表・新聞記者・市議員等百余名を招待」とあり、当時徳島市がこの診療所の開設に大きな期待を寄せていた状況が良く分かる。

初代診療所長として大阪医科大学（現在の阪大医学部の前身）より小山順治医師を招聘し、職員は小山医師（内科）のほか書記、薬



剤師、看護婦、看護助手兼小使、車夫兼小使がそれぞれ1名、計6名であった。新進気鋭の小山医師の人気は高く、治療費が一般開業医に比べて安価であったことから、利用者は急激に増えて、翌月より内科医師をもう1人増員した。さらに同年5月には市民から強い要望の出ている産婦人科を新設し、産婦人科医師1名と産婆1名を採用して公設産院を開設している。この開設に伴い市立実費診療所の利用者はますます増加し、古い民家を改造しただけの施設では対応が困難となってきた。

2. 市立中洲病院

市立実費診療所が市民の人気を集め、盛況であることは非常に喜ばしいことであったが、施設の狭さから患者への対応が十分にはできかねるようになってきた。これを解消するため昭和3年に閉院した私立三宅病院「所有者三宅 速、徳島市堀裏町字巽浜3番地の2（現徳島市幸町3丁目22番地）」を買収し、ここに診療所を移転する方針を立て市議会に提案した。この案に異を唱える議員もあって賛否の論戦があったが、病院の拡充を望む世論のバックアップもあり移転案は認められた。市は早速に買収交渉を始め、昭和5年2月に持ち主の三宅 速（後の九州帝大外科初代教授）から土地と建物を4万6,319円で買い受けることができた。市は買収した建物の補修繕を行い、同年4月13日に市立診療所を徳島本町からここに移し、名称を市立中洲病院と改称した（図2）。

移転後の中洲病院は施設に余裕ができたこともあって、翌5月に外科と眼科を開設し、同年12月にはレントゲン科（牧野利三郎部長）が新設された。その後昭和9年に小児科、同10年に耳鼻咽喉科、同11年に経費1万2,000



図2. 市立中洲病院

円でラジウム50mgを購入し、レントゲン科を理学的診療科と改め、ラジウム治療を開始した。

以上のような段階を経て中洲病院は、内科、外科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、小児科、理学的診療科の7科を擁する病院となり、入院室は最初27室であったが、増改築を重ねて入院病床84床となり、総合病院としての役割を果たすようになった。この病院の職員数は医師17名、薬局員5名、産婆3名、看護婦15名、同見習31名、事務局員7名の計78名であった。

当時同病院の院長であった小山医師は、短期間のうちに診療科を増やし、病院施設が充実し、患者数が増加していったことについて、自著書（一診療所長より大学病院長まで）の中で以下のように分析している。中洲病院は当地域内では唯一の公立病院であって、治療費が一般の開業医に比べて低廉であったこと、そして新進気鋭の医師たちに恵まれ、職員一同が一致協力して診療に精励したこと。その実例として、診療開始時間が夏季は午前8時で、冬期は午前9時であるが、夏冬ともそれぞれ30分前には各科の医員、看護婦、薬局員、事務員をはじめ小使にいたるまで全員が仕事に従事したことを挙げている。このようにこの病院の職員は1年中、所定の時間よ



り30分ずつ早く出勤して勤務につくのが普通で、誰一人不平を言うものはなかったという。

しかし一方では、患者の増加に伴って施設の狭隘と病院側の人手不足をきたすことになった。その状況について徳島毎日新聞（昭和11年8月10日付）は「忙しさを乗り越えた中洲病院」という見出しで、次のような記事を載せている。「中洲病院は1日の患者数700人を突破する盛況で患者間で順番の競争が起り、午前6時ごろから受け付けに殺到して係りの看護婦が悲鳴をあげるだけでなく、7つの診療科に集まってくる患者を取り扱うには現在の病院は狭すぎる。廊下が事務室兼患者待合室など非常時の光景である。これでは患者も困るであろうが、院長・部長以下下足番に至るまでが、患者の犠牲になっている感じがする。現に看護婦など甚だ手不足とのことであり、医員間に健康を損なうもの相次ぐとの消息も聞く。設備の拡張、充実等は新築竣工まで待つとしても、さし詰め医員以下従業員の増員は急務と見られる」と。

中洲病院の建物施設が来院患者数に比して狭くなり、大改造を市議会に提案したが、現在地での改造では敷地に限界があり、もっと広い土地で広大な病院を建てるべきであるという意見が多く出て、市議会の総意は中洲病院の移転に傾いていった。市議会で決めた中洲病院建築調査委員の一行5名は、名古屋、岐阜、松本、神戸、津、堺、横須賀、静岡の各市立病院を視察し、病院の規模と立地条件、診療費、伝染病院との併設関係および職員の給与などを調査して帰ってきた。この調査内容を参考にして、設置場所については新蔵町にあった元専売局の跡地が候補地に挙げられた。この移転改築する病院は徳島市字新蔵町南30番地（現新蔵町3丁目31番地）で用

地を買収し、昭和12年12月に着工、同13年11月に竣工した。

3. 市立市民病院（新蔵町）

新蔵町に新築した市民病院の全容は敷地面積3,544.67坪（1万1,697.4平方メートル）、建物延べ面積2,129.64坪（7,027.8平方メートル）で、本館には内科をはじめとする7診療科の診察治療室、事務室、薬局、手術室、研究室、試験室、医局を備え、外来患者の待合室には売店も設置されていた。ベッド数180床で、そのほかに看護婦寄宿舍もあって四国一の総合病院としての威容を誇っていた（図3）。



図3. 市立市民病院

中洲病院から新しい病院への移転は昭和13年11月29日から始められ、12月の3、4日の両日で入院患者の移送を完了して12月5日から診療を再開した。病院の名称を市立市民病院と改め、移転改築落成式は昭和14年5月28日に盛大に挙行された。この落成式の参列者に記念品として、この新病院の絵葉書が贈られたようである（図4、5）。

徳島市の病院事業は昭和3年2月1日に市立実費診療所として開所して以来、黒字を続けていて、新蔵町に移った市民病院においても市民の要望に応える診療姿勢が功を奏し、

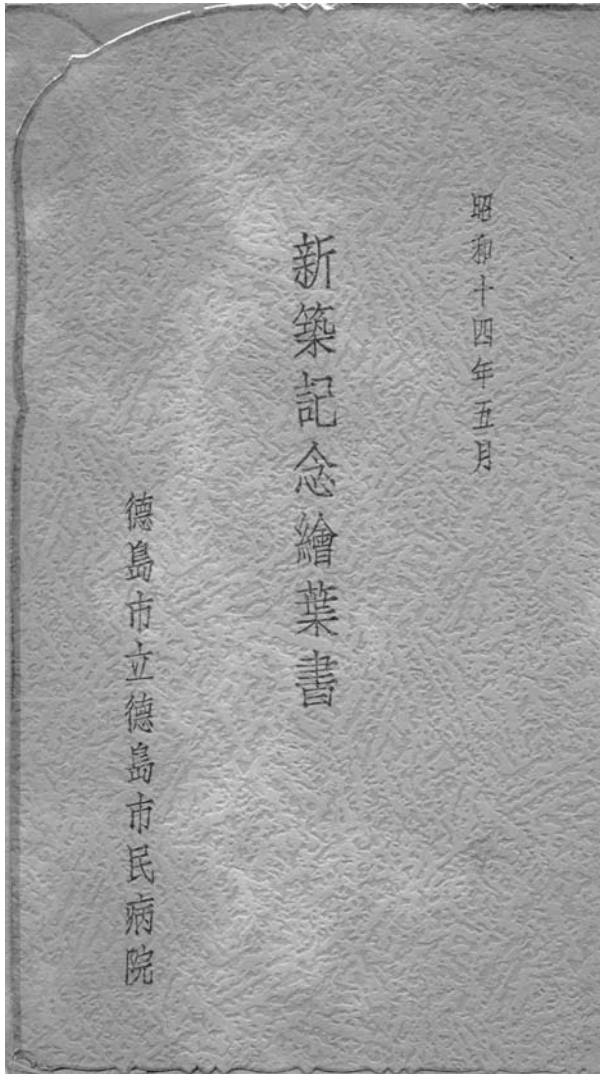


図4. 繪葉書の封筒

経営的にはますます順調に推移していた。昭和15年6月8日付の徳島毎日新聞の論調で「黒字の市民病院、黒字だけは市民に戻せ。社会事業として再検討の要あり」といわれたほどであった。

市民病院の利用者は増加し、経営的には黒字が続いて病院としては順調に推移していたが、世の中は次第に戦時色が強くなっていった。昭和16年12月には太平洋戦争に突入し、出征兵士が多くなっていく中で、国内の男子が減っていった。病院においても医員で応召される者が増えるし、開業医も戦地に送られ

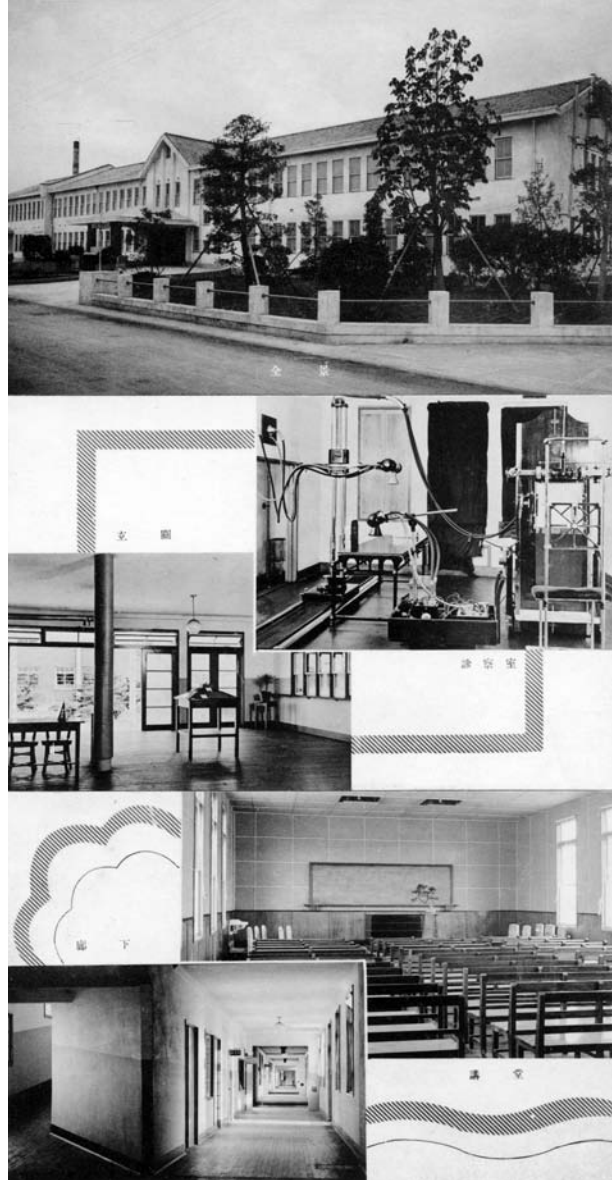


図5. 3枚組の繪葉書
(元病院長 日下和昌氏提供)

ることが多くなって、病院でも地域においても一般の診療に支障をきたす状態が出てきた。そのような世情であった昭和17年の夏に市民病院にとっては思いがけない事態が起こってきた。

この頃軍部が軍医の不足対策として官立医学専門学校の設立案を練っていることを知った辻山治平徳島県知事は、森 六郎徳島市長と連携して徳島にこの官立医専を誘致する構想を持ったのである。(つづく)